

寛永・寛文年間における武家茶道

片桐石州の茶道(1)

嶋内 麻佐子

要旨

大名茶の完成は遠州、そして石州は新たな大名茶を構築したとみるべきであろう。幕藩体制の熟覧期に、石州の茶は柳営茶湯と称されるに至った。織部、遠州の茶湯とどう違うのか。石州の生い立ち、茶湯の経歴、更には侘び茶を基本とする千利休と石州の比較、大名茶として時代の要請を背景としながら、独自の茶風をつくり上げていく石州の茶への一考察である。

キーワード

片桐石州、一畳半の伝、柳営茶道、侘び茶、石州流

はじめに

武家茶の完成にあたっては、その時代の要請が茶道形成において大きな意味を含んでいる。利休以後、利休七哲の一人でもある古田織部によって武家茶の完成を見るが、それはあくまでも、「幕藩体制の成立期に即応した茶のあり方¹⁾」が求められていたのであった。かつて、利休の求めた侘び茶は、武士胎動の時代では好まれなくなった。そのため、破格的な茶が時代に即応した形で完成した。そのあとを継いだ、小堀遠州は、はじめは織部独自の茶のスタイルを模倣したが、やがて官僚としての茶のあり方に即した、いわゆる「茶の湯のなかに身分秩序を取り入れた、いわば新興支配階級にふさわしい文化としての茶のスタイルを作り上げること²⁾」このことが時代の要請であった。遠州流の茶は、「綺麗さび」と称されるように茶道具に王朝趣味を加えたり、中興名物や遠州七窯を制定するなど安定と優雅さを基軸とする茶であり、家光との交流を通じ將軍家、及び幕府内部にもその茶は定着した。遠州亡き後の時代を担う石州の茶は、「封建的思惟を逸脱しない範囲

でわびの理念を取り入れることであった³⁾」つまり、これまでの織部や遠州の茶の形ではなく、わびの理念を武家茶の中に復活させた茶であった。石州の侘びは、利休の侘び茶そのものをまねるのではなく、武家理念に添った形の侘び茶の要請。つまり、主従関係を明確にする身分相応の茶である。石州は『徳川実記』⁴⁾に見られるように、織部も遠州も名だたる茶人であったが石州はそれ以上に茶人として名声があり、石州流茶人を輩出することになったと記してある。また、『石州三百ヶ条』を制定したことで、幕府の茶道としての地位を確立した。これらのことを前提にして、將軍家茶道師範としての寛永・寛文年間の武家茶の確立にあたった利休から道安そして宗仙、石州へと伝えたと言われる侘び茶について考察してみたい。

1. 大名片桐石州

遠州の大名茶の完成の後について、大名茶というより武家茶として、將軍、大名のみでなく、旗本、武士にいたるまで、「相応の茶」を普及せしめたのが石州の茶である。

石州は慶長十年から延宝元年（1605～73年）石見守貞昌、茶道石州流の創始者である。石州は豊臣家臣である片桐東市正且元の弟主膳正貞隆の長男として、摂津国で生まれ幼名を鶴千代といい、長じて長三郎貞俊となる。のちに貞昌と改めた。法号は三叙宗閑。寛永元年（1624年）十二月、従五位下石見守に叙任し、同四年父の死後、遺領大和河内一万六千四石を継ぐ。同十年、京都知恩院の普請奉行をつとめ、同十九年關東郡奉行に任ぜられる。寛文三年（1663年）石州五十六歳の年に、大和小泉に慈光院を建てた。寛文五年（1666年）十一月、石州六十一歳のとき將軍家綱の御道具奉行を務めた。このことで、家綱の茶道師範となり、『三百ヶ條』の茶湯覚書を記して上進し、柳営茶道の規矩を定めた。石州登場以前は、遠州の茶が全盛であった。家光時代から、家光と遠州の交流によって將軍家、及び幕府内部に定着した遠州の茶は石州以後も根強く残された。その小堀家が、遠州の茶を継承しているにも拘わらず、幕府の茶の主流にならなかったのは、その茶風に起因するところが多かったのではないだろうか。

2. 柳営茶湯者としての石州

茶系としては、利休を源にしているが、織部や遠州とは異なり利休 道安（利休の長男）宗仙の流れを汲んでいる。石州は元和六年頃（1620年～）から宗仙に茶を学び始めている。宗仙は、寛永九年（1632年）に没している。つまり、約十二年間学んだことになる⁵⁾。その茶は、宗仙晩年にかけて道安直系の茶湯が伝授されていることになる。そのことが、石州の茶を形成する時、利休の侘び茶に回帰するよりどころになったのではないかと思われる。

石州自身幕府の役人としての職務を果たす一方で、寛永文化を形成していた時期に知恩院の普請奉行につき、九年間京都での生活を送った。この時期に金森宗和、松花堂昭乗、小堀遠州などの大茶人との関わりをもち、茶湯者としての石州の地位を確立した時期でもあった。そ

の頃、家光の信望が厚かった遠州の茶会にも出席している。『松屋会記』をみると、

「寛永十八年正月十日朝、伏見ニテ
小堀遠江守殿へ 片桐石見守殿 イタミ
ケン齋 中井五郎助 藤林助之丞 久重
五人

茶ヲ立出ス時、不洗ハソヘス御出シ候、茶
初口石見殿、ニケン齋、三遠州、残八次第
二呑候、筥ニテ茶ワンカタカタ度々ナラ
シ候也、茶立仕舞テ、今一服トモ不問ニ仕
廻候也、ツホ蓋ノ単置様、イツモノ如ク、
客御茶入ト所望アレ共、無言ニテツホ御出
シ候、盆モ袋モ、客ヨリ所望ニヨリ出テ、
時、不洗ヲモトノ事ニテ、不荒ヲソヘテ出
候、袋ハ釘ヨリ取テ、客ノ前ヘホウリ出サ
レ候⁶⁾、

とあるように、遠州の奇妙な振る舞いを記録している。寛永十八年（1641年）の正月、伏見での朝会に五人の客が呼ばれた。その席では、石州が正客を務めている。この記述の内容は、遠州が茶筥を洗う時にカタカタと音をたてたり、茶を点てて仕舞い終わる時も、亭主から正客に挨拶するものであるがそれもないままに、仕舞いをしている。また、客から拝見の所望があったにもかかわらず、挨拶もせず無言にて茶入れを出したり、仕服は釘にかけてあるのをそのままとって、客前に放り出したりと、無謀な振る舞いである。遠州ほどの大茶人がなぜ、このような振る舞いをしたのか。桑田忠親氏は、「脂ののりきった石州の茶の生硬さに対して、老巧の遠州が加えた一種の訓戒ではなかったか、と思われてならない。つまり、作法やお点前ばかりが茶ではない、という意味を匂わせたものに違いない⁷⁾」と言っている。特に脂ののりきった時期では、形が先行してしまい心の修養まで到達していない場合が多い。その事を含めて、石州の茶の技量を試すための振る舞いのようにも見えるのである。このような経験は、石州にとって精神的な面を育てるための、大事な修養期間となったと思われる。さらに、第二

の修養期間と考えられるのが、小泉在郷の約七年間である。この間に、家臣である藤林宗源とともに茶に専念している。石州と宗源は藩主と家臣の間柄だけでなく、ともに宗仙に茶湯を学んだ茶友でもあり、宗源は宗仙の同門でもある。よって、宗源は石州とともに桑山流茶道の奥義を窮めている。その後石州は、江戸に出て幕府役人としての勤めを果たすかたわら、石州自信の茶を見出している。『嚴有院實紀附録』の記述に、

「またその頃、石見守貞昌と船越伊豫守永景とは、ことさら陸家の風をおこし、玉川の流に遡り、年久しく茶事の宗匠として、その名一時にたかゞりしかは、寛文五年霜月の頃、兩人を御茶室に召れ、其技をなさしめて、御覽あり、老臣も陪席して、彼等がその技に練熟せしを賛嘆し、公にも殊に御氣色にかなひしとて、兩人に饗、たまひものなど下されしとそ⁸⁾、」

とあるように、その頃、石州と船越永景は、遠州の茶とは異なる「陸家の風」、つまり新しい茶風を起こし、その名が家綱にも知られることになった。そこで、家綱の所望により寛文五年(1666年)十一月八日に数奇屋にて、船越永景とともに茶の点前を披露している。そこに陪席していた老中たちも、その技の見事さを褒め称え、家綱の思いに叶ったことで兩人に褒美を与えられた。先述したようにその後、『三百ヶ條』を上進したことで將軍家及び、幕府で石州の茶が柳営茶道と称されることになった。石州は、承応年間から寛文年間にかけて活発に茶道活動を行い、京都時代に培った人脈をフルに活用した。また、石州の主催する茶会に、有力大名達を招いたことが茶の伝播に幸いしたのではないだろうか。それと、当時の武家の気風と、石州の茶が合致するところが多かったため、主流になり得たのではないかと思われる。その石州が、家綱の茶道指南役になると多くの大名や旗本が、石州門をたいた。石州の門下には、庄

倒的に大名の名が多い。家綱まで、その門下の扱いをしている。石州の茶の伝授は、伝書の筆字を伴う完全相伝である。そのため、伝授を受けた者は、伝授された茶を自分の茶道として、新しく伝播していく事が出来た。会津藩主・保科正之、平戸藩主・松浦鎮信、石州の付家老・藤林宗源、仙台藩茶道頭・清水動閑、將軍家茶道組頭・野村休盛、高源院開祖・怡溪宗悦などが連なり、この他にも朽木伊予守、松平不昧、井伊直弼などが石州の門下として石州派を名乗っている。しかし、実際に伝授にあたったのは家臣の藤林宗源である。

3. 石州三百ヶ條

『石州三百ヶ條』は利休の息子、道安から宗仙を経て石州に伝わった茶法である。それを、石州自身が三百ヶ條にまとめたものであると、一般的には理解されている。茶の覚書を三百ヶ條に分説して献上したことで、將軍家茶道の規矩が定まったとされる。

『石州三百ヶ條』の構成は全部で三巻からなり、第一巻・第二巻・第三巻と、それぞれ百條ずつを記している。内容は、茶の精神理念・故實・点前・置合飾付・道具・茶庭・茶室・花の八つの項目に分類されている。

茶道は、点前と精神が基本となるものである。とくに、茶の精神理念に関することを多くの故實から引用している。この三百ヶ條について西山松之助氏は、「石州自らの制定ではなく、石州死後における直弟子・高弟子数人の合同会議によりその条文だけが制定されたものと考えられる⁹⁾。」と述べている。現に石州自らの筆で三百ヶ條を記したものが見つからない。これらは、石州流の諸派を開いた石州門人怡溪和尚、怡溪の門人住住軒、松平不昧、宇佐見黙斎、清水動閑らにより注釈が施されたことで、茶道石州流の宝典となったとも考えられている。

4. 侘びの理念について

石州のめざした茶道は、人々の生活に呼応した自分の地位、立場にふさわしい茶を心懸けることである。石州の時代、武家社会の安定がやがて奢侈に流れ、華美な風潮の中にあることを抑制をする精神が、分相応の茶を後押しをしたのであろう。利休の推奨した侘び茶は『南方録』に、

「侘ノ本意ハ、清浄無垢ノ佛世界ヲ表シテ、コノ露地・草菴ニ至テハ、塵芥ヲ佛却シ¹⁰⁾、」

とあり、利休の茶は、仏の世界を基本にした草庵の侘び茶である。また、『禅茶録』にも、

「侘の一字は、茶道に於て重じ用ひて、持戒となせり¹¹⁾」

と記しているように、茶道の中心は侘び茶であった。しかし、利休の師である紹鷗は、茶の考え方を唐物中心に置いていた。また義政、信長、秀吉の唐物への執着は相当なものがあつた。しかし、利休の時代は、秀吉の茶への傾注もあって、各大名はもとより町人に至るまでの広がりを見た。このような、茶人層の中で唐物茶器をすべての人が求めるには、経済的限界を見ることになる。利休が、茶道を広めるとすれば、唐物中心の茶を見直す必要が出てくるのである。そこに、侘び茶の出現があつたのではないか。

『山上宗二記』に、

「一物も不時、胸ノ覚悟一、作文一、手柄一、此三箇條ノ調タルヲ侘数寄ト云¹²⁾」

とあり、侘び数寄者は、これといった名物の道具一つもなく、胸の覚悟をもち、作文すなはち、茶事の上で工夫を凝らせるだけの作意をもち合わせている茶人。つまり、この三つの条件を持ち合わせた茶人のことである。ここでは、数寄者の条件に唐物所持が省かれていることに注目すべきである。このように利休の茶は、侘びを心の極みとしてとらえながら、現実に唐物を所持していなくても数寄者になることを述べたことが特徴であり、そのことは、多くの茶人

層を輩出することになった。

石州の茶も、利休の侘び茶を源にしている。寛永五年（1628年）石州五十七歳の折に記した。『侘びの文』をみると、

「我思ふ處をいはず、炭斗ふくべにて大方知るべし。あばら成る民家の垣根又は植生の軒にさがりて、天然と侘びたる姿を生れ得たる者也。彼の顔淵が一瓢の侘びたる例しにぞひとしけれ。おのれ様々に形をなし色々さびを出す、是生得のさび者にて人作の及ばぬ所也。宗易是を其儘にて炭斗に用ひ結構を盡せし座敷又は結構なる道具と、なれべても聊かはづかしからぬは、茶道具の體を得たるならずして、是とならふべき此の道自然は瓢にぞありけりつらめ。數寄者は爰に眼を付けて、月の夜雪の朝を樂しまんに何か美器珍寶を頼むべきや。器物を愛し風情を好むは形を樂しむ數寄者なり。誠の數寄者とは云はれまじ（心を樂しむ數寄者こそ誠の數寄者とは云ふべけれ 異本）譬へ千貫萬貫の道具たりとも炭斗ふくべ一つ程の數寄の本意は叶ふまじ。幽なる猿戸少しあけ、物さびたる木陰に道一と筋つけて落葉朽葉さへ掻きあへぬ庭を、わづかの入口よりくゞり入り二疊三疊に過ぎぬ座敷を溝へたる山居、隱者の風情を慕ひ唯塵外の閑をなす人珍器を集め結構を（不明）只連子竹うち替へて新敷ふくべを引切り炭斗入れなんとするこそ、氣を轉じて謂はむかたもなし。云はゞ如何計のついへならむ。閑居相應の樂しみ也。思ふに數寄は貧人も成し易く富者もなし難きものにこそあれ¹³⁾。」

とあるように、侘びの心境を利休が好んだ瓢箪に見立てている。自然な侘びの風情は、作意を加えず、自然と姿が出来上がってゆくものである。民家のあばら垣根や植生の軒にさがって、侘びた姿を生まれつき持っているものである。つまり人作の及ばない數寄の本意を見出すことが侘びの基本である。どんな立派な茶室や

道具と比較しても、ふくべの炭取りの味わいほど、数寄と呼ぶにふさわしい道具はない。本物の数寄者とは、形や高価なものにこだわるのではなく、心を楽しむことが出来る人。これが、本物の数寄者であると述べているのである。このように、利休の侘びの理念を重要視しているが、微妙な相違点もある。

『宗門公自筆案詞』には、

「茶の湯さびたるは吉、さばしたるは悪しと申事、大名などの侘びたる者のまねをしてさばしたるは相應せぬ事に候間、さばしたるになり可申哉と被仰下て大方埒明き申候。さびたるはよく候と申儀は、又世の事に候間能々御思案候て可被仰越候。只今被仰下候は其程々を知りて萬事身の行を仕り候事にて候はんかと被仰下候。最には候へども夫はかくの如く被仰下候御言葉斗にてきく事にて候。人間の上身の程を知る事が不知により學文（註學問）參學色々心掛け候へ共人も埒明きたる者昔より稀にて候。其埒の明くを待ちては一代何事も成就はせまじく候。只さびたと申事に御心被附、御心掛可被成候。別而さびたるは吉と申事御座候間、此處を被仰當候はゞ學問參學仕たる者の心中にもおそらく御負被成間敷候¹⁴⁾。」

とあり、茶の湯のさびたのはよいが、さばしたるは悪いという意味の事を述べている。大名のような身分の者が、下層階級の貧乏人の侘びの真似をして得意になるのはふさわしくない。さびとは、身の程を知って、身の行いをなすものである。と石州が述べている。

「惣じて茶の道は慰み事にて候へ共、道理は無き物と御心得可被成候。皆々虚なることにて候。去り乍其を虚を立て奥に眞實有と御尤に候。如此茶の湯の道を御立不成候へばむざと面白きに迷ひ深切もふかくなり、結句茶の湯の道悪敷成り申事に候。此段を松永正能々心得有て只四書五經を讀み候はんよりは、文盲の者は茶の湯を仕習ひ

候はゞ増り可申と被申候由申傳へ候。兎角に茶の事世間には、理をせめて理に叶ひたる事と人々申候。如此我人存候故散々の物に成事にて候。右の通り無道理してしかも虚なる所から實に入ると可被思召候。其實は人々面々の心中に有之事にて候所作とは少しもあらわさぬ様に仕るにて候乍去見知りたる者には又見知る事にて候¹⁵⁾。」

松永弾正は、ただ四書五經を読むよりは、物事の弁別がつかない人は、茶の湯を習ったほうがましである。とかく、茶の事を世間では理をせめて理に叶いたる事であると人々は言っている。この、虚なる所から、実に入るといのは、人々それぞれの心中に存在するものであり、所作には表さないようにすべきであると述べている。

「數奇は皆見せ物と人々存る事にて候。左近杯は一切見せものにて無之由人々へも物語被仕候。如此違ひたる事にて候儘、世間に存候様に成り候へば一つも役に不立候。見せ物に仕り候へば實より虚になり申候。右様にしかし候故、眞實も道理も皆々失ひ申候に付茶の湯は諸道の惡魔になり、又は奢りの根本にも罷り成申候。右之段々拙者今迄人に申たる事も無之候へ共、貴様御事は御老人さりとては御數奇にて御執心深く御座候まゝ、自然茶の湯に御迷ひ被成候へば勿體なき事と存じ入候。數奇は野の末・山の奥道の端にも不斷の座舖にもみちみちて御座候也、夫を見不知候故に拵へ候はねばならぬと計人々存候。其處を能々御合點被成候得者、樂の本に成候て武士は武士の道に叶ひ、町人は其の家を保つ便り（頼り）になり貴人も賤しき者にも役に立ち上下をきはぬ事にて候。身にあらはし手にはし言葉にきこゆる様に仕り候人は本の數奇者にては無之候。色をも香をも知ると可被思召候見知らぬ眼には少しも見不知がよく候。三拾年に及び候御近づきにて御心中殊勝に被存候故むざとしたる事書付け置き

候。老少不定に候へば浮世の事と被思召被成御一覽候（かしく）恐入申候¹⁶⁾。」

ここでは、数寄を見世物という人もいるが、桑山宗仙は、数寄は決して見世物ではないと話された。数寄は、野や山の奥道にも普通の座敷にも満ちているが、その事に気づかない人が多い。その所をよく理解すれば、武士は武士の道を、町人はその家業を保つ頼りになる。貴人は身分や地位の低い者を差別せず、すべて上下を嫌わず茶においても、分相応な茶のあり方を説くものであるとする。

5. 大名茶としての一面

石州の大名茶を思わせる一面として、『塊記』には、

「總ジテ茶湯ニ、中立ヨリ衣服ヲ着易ルコト、始メニハ華美ナルモノヲ着シ、後ニシメヤカナル物ヲ着シ申スガ好キコトニ候ヤ、但シ始メハシメヤカニ、後ニハナヤカナルガ好ク候ヤト伺ウ、仰ニ、夫ハ昔ヨリ話ノアルコトナリ、嚴有院ノ慰ニ、皆々茶湯ヲ云フラレタルニ、稲葉美濃守ガ、中立以後大小紋ノ衣服ニ、ハナヤカナル上下ヲ着シ仕タルヲ、人々異風ナルコトニ思ヒテ、此事ヲ片桐石見守ニ話セシニ、石見守ガ云ケルハ、其處ガ茶湯ナリ、必シモト兼テ定メラレヌ處ナリ、此度ノ茶ハ、大樹ノ御慰ニ仰付ラレタル事ナレバ、何ガナ珍シキコトニテ、慰ニナルヤウニト、心得尤ナリト申サレシ由ニテ、此ノ時代ノ話ニナリタルコトノ由ナリ、此事ヲ三菩提院殿ニ話シタル人ノアリシヲ、一門ノ仰ニ、夫ハ合點ノユカヌコトナリ、慰ニナラバ、左様ノ事ニテナクモ、如何ヤウニモ慰メヤウアルベキコトナリ、衣服ヲ異風ニ仕立テ、慰ニナルヤウニト云コトハ、茶ノ本意ニハアルベカラズ、點ノユカヌコトナリト仰ラレタリ、總ジテハナヤカナル衣服シメリタル衣服ト云コトニハ非ズ、着易ルハ、始ヨリ給仕ヲシ、花ヲ生ケナドシテ汚シタ

ル衣服ナル故ニ、茶ヲ點ルニ臨テ、改テ出ント云コトナレバ、衣服ノ模様ニ心ハアルベカラズ、尤モ所ニモ、客ニモ、場ニモ、時節ニモ、因ルベキコト、着易ヘヌコトモアルベシ、必シモト云コトニハアルベカラズ¹⁷⁾。」

とあるように、家綱の病氣見舞いの茶会の折、稲葉美濃守が中立ち後（後座）の席中に、大小の紋入りの華やかな衣装を身に着けて現れた。皆、その異風なる様子を見て、石州に中立ちの時に、衣服を着替えるのかどうかについて尋ねた。すると、衣服を替るといのは、給仕をしたり、花を生けたりと、衣服が汚れた場合は着替えて席中にでる。それは、客に対して失礼にならないようにとの、亭主の配慮によるものである。しかし、一般的な茶会では、衣服の着替えはしない。ただ、その場に応じた対応はすべきである。なぜなら今回は、家綱の慰みの茶会であれば、珍しい試みをするという心得があってもよい。むしろ、人間生活のあらゆる部分から事の状況を汲み取り、その精神を状況に合わせた形で表現することも茶の道として重要である。つまり、基本は守ることは大切であるが、時と場合によりその亭主の働きとして趣を変えるのも茶のあり方である。

このような考えは、石州の型破りな一面と捕らえることもできるが、むしろ大名茶人としての、分相応の茶のあり方でもある。利休の侘びは全てが無であり、大名も茶人もない無の境地であるが、石州ははっきりと身分を区別しそれに応じた茶のあり方を求める。分相応の茶は無ではない。ここに為政者としての石州の茶の特徴がある。このことを石州の限界と考えるか、現実をふまえた茶人であるかは、大きく分かれるところである。

この様に石州の茶道観には、大名茶道の一形式を作り出していた遠州とは異なる所が多く、遠州の「綺麗さび」の後に象徴されるように、明るく軽快で優美な茶風であったのに対して、石州は侘び茶への傾倒を特色としている。その

茶のあり方は、分相応の侘びの理念を求めることが重要であると説く。つまり、大名には大名の侘びがあり、町人には町人の侘びがあり、身分相応の侘びを求めるべきであるとする、石州の茶湯心情が見られるのである。

おわりに

石州の茶は、柳菴茶道としての格式ある茶の形態と、一方では石州自信の茶としてのあり方を説いた茶道感であると思われる。それは、利休の息子・道安から宗仙を経て、石州に伝わった茶法であるため、利休の侘び茶の精神は、石州の茶の中に引き継がれた。ただし、石州の侘び茶は、利休のそれとは微妙に異なり、身分相応の侘び茶の理念が石州によって形づけられたと思われる。

注

- 1) 谷端昭夫(1988)『近世茶道史』淡交社, 395頁.
- 2) 同上, 395頁.
- 3) 同上, 400頁.
- 4) 吉川圭三(1931)『國史大系徳川實紀』第4篇 吉川弘文館, 550頁. 寛文五年十一月の条「諸大名の中にも、古田織部正重然、小堀遠江守政一など、嗜者の名を得たる人世々乏しからず、名門戸

流派わ競にいたる。貞昭當時この道の宗匠にて、尤その名高く、今の世にも石州流としてその門徒猶多し。」

- 5) 野村瑞典(1985)「片桐石州略年譜」『定本石州流』光村推古書院, 44頁.
- 6) 永島福太郎(1977)「松屋會記」『茶道古典全集』第9巻淡交社, 382頁.
- 7) 桑田忠親(1980)『茶道と茶人』3巻秋田書店, 161頁.
- 8) 吉川圭三(1931)『國史大系徳川實紀』第4篇 吉川弘文館, 550頁.
- 9) 西山松之助(1982)『家元の研究』1巻吉川弘文館, 338頁.
- 10) 久松真一(1977)「南方録」『茶道古典全集』第4巻淡交社, 264頁.
- 11) 柴山全慶(1977)「禪茶録」『茶道古典全集』第10巻淡交社, 296頁.
- 12) 桑田忠親(1977)「山上宗二記」『茶道古典全集』第6巻淡交社, 52-53頁.
- 13) 末宗廣(1937)「石州流茶道」『茶道全集』巻11 創元社, 210-211頁.
- 14) 同上, 213頁.
- 15) 同上, 213-214頁.
- 16) 同上, 214頁.
- 17) 柴田實(1977)「槐記」『茶道古典全集』第5巻 淡交社, 367-369頁.